

目 次

タイを訪ねて	石原洋介 (1)
自分で決めるということ	北村香織 (5)
新規受入図書案内 (2007年4月～2007年9月受入分)	(9)

タイを訪ねて

法経科講師 石原洋介

先ごろタイを訪れる機会があった。国際金融と東南アジア経済を研究フィールドとしている私ではあるが、じっさいに同国を訪れるのは初めてで、新鮮な発見と驚きそして困惑に満ちた旅になった。ここでは、その一端を紹介してみたい。

3月下旬のまだまだ肌寒さの残る日本から約5時間のフライトを終え、バンコク郊外の空港に降り立つと、すぐにむせるような真夏の空気に包まれた。赤道に近いタイでは4月から5月が年間で一番暑い季節となるため、すでにバンコクは連日の猛暑日であり、日中の気温が40度を超えることも珍しくない。とにかく滞在中この暑さには終始閉口させられた。聞くところによれば、大学はすでに夏休みに入り、4月初めには日本の正月にあたるお祭りがあるのだという。要するに勉学にも労働にも適さない時期なのだ。屋外で土木作業をする人々は日陰で涼をとり、放し飼いの犬ですら木陰でうずくまって動こうとしない。急激な経済発展の中で失われつつあるというタイ人本来ののんびりとした国民性を見た気がした。

さて、今回のタイ旅行は観光スケジュールが旅行会社によって設定されているツアー旅行ではなく、8日間の滞在中はすべて自由行動となる。そのうち一部は研究調査に当てるため、残余の時間をできるだけ効率よく観光に使いたいというのが私たちの考えであり、観光ガイドブックを見ながらそれなりに計画を練っていた。しかし、空港やホテルはエアコンが完備されているものの、観光名所であるワット(=寺院)や遺跡には冷房はないため、観光地巡りをしていると発汗と発熱で頭がクラクラしてくる。正午前後の数時間はホテルに駆け戻り、しばらく休みを取らなければ身が持たない。こうして練っていた計画はまさに机上の空論となってしまった。

暑さに加え、バンコクで悩まされたものは世界的に悪評高い渋滞と大気汚染である。バンコクでは、近年になってモノレールや地下鉄をつくり、渋滞緩和につとめているようではあるが、なぜか人気の観光スポットである王宮や有名なワットの付近には路線が走っていない。したがっ

て移動手段として重宝したのはタクシーだった。観光はタイにとって主要産業であり外貨獲得源でもある、外国人観光客には鉄道より数段割高なタクシーを利用してもらいたいと考えて故意に人気観光スポット付近に鉄道の駅がないのかもしれない。それはともかく、タクシーで市街の中心部に近づくとあっという間に前後左右が車やバイクで埋まっていく。排ガスもひどく、とても車の窓を開けてはられない。いくら渋滞緩和策を実施しても、農村からの人口の流入や車の台数の増加に追いついていけないのが実情のようである。

なかでも驚かされたのが、渋滞緩和をねらった大胆な道路規制である。初めてタクシーに乗ったとき、大きな交差点で行き先とは反対方向に曲がったのが最初の洗礼だった。とっさに運転手が行き先を間違えたと思い、あわてて注意した。幸い英語が通じる運転手で大丈夫だと笑顔と身振り手振りで説明してくれた。こちらも落ち着いて車外をよく見て気づいたのだが、走っている道路は片側2車線もある広い道路なのに4車線すべての車が同じ方向に進んでいる。要するにこの広い道は一方通行になっていて、この方向に進むしかないのである。そして少し行くと道路がUターンして軌道修正できるようになっていた。また別の交差点では、私たちの乗る車が中央分離帯を越えて反対車線に進入していくので、またまたびっくり。だが、これもよく見ると、中央分離帯をはさんで計6車線ある道路の一番右端だけが反対車線で、残り5車線がこちら側の車線になっていた。

実は、これは10年ほど前にバンコク市が悪化の一途をたどる渋滞を緩和しようと打ち出した道路規制なのである。すなわち市内のいくつかの道路を一方通行に変更して車の流れを改善しようと試みたのである。私は以前タイについて書かれた本の中でそれについて読んだことがあったのを思い出し、これがそうなのかとようやく納得したわけだが、ここまで大胆に主要道路を一方通行（又はそれに近い状態）にしているとは正直思わなかった。もっとも、その本によれば、けっきょく目的地まで遠回りすることになるのでトータルの運転時間は短縮されない場合が多いようなのだが、それでも、とにかくにも車は動くのでドライバーのストレスは減って市民にはおおむね好評だったのだとか…。しかし、おかげで道路網は格段に複雑になったのは確かだ。昔の車線のラインや中央分離帯が残っているので、うっかりすると反対車線に迷い込んでしまいそうだ。最初はドライバーが目的地まで最短コースをたどっているのかどうかを、つまり運賃を意図的にかさ上げされないかどうかを心配して地図を片手にタクシーに乗りこんでみたが、道路の複雑さについて一度もそれを検証することが出来ず、すぐに検証しようという努力を放棄するようになった。

幸いなことにタイ人は東南アジアの中でも穏和な人が多く、他の国に比べて凶悪犯罪の数も少ないのだとか。運賃をごまかすにしても、むちゃくちゃな金額をふっかけてくることはめったにないだろう、というのがタイで知り合いになったチュラロンコーン大学（タイの東大と言われる名門大学）元准教授であるブサバさんという女性のお話であった（彼女は日本に留学経験があり日本語も上手であった）。彼女によれば、こうした美德は元来ののんびりとした国民性に加え、国民の95%が仏教を厚く信仰し、さらにタイ人男性が成人するまでに2つの義務を負っていることから寛容されるのだという。義務のひとつは徴兵制であり、学歴に応じて定められた期間兵役に就かなければならない。もうひとつはタイらしいユニークな点だが、法的な強制としてではなく、あくまで慣習として男性は成人までに一度出家するのだという。寺院で

仏教の知識を深め、精神修養を積むことで一人前の大人になるのだそうだ（強制ではないので出家している期間に定めはないそうだ）。人格形成の決定的な部分を担うのが軍隊と宗教というのは、日本人である私には抵抗感があることではあるものの、興味深い話であった。

さて、古い遺跡や寺院めぐりが好きな私が今回の旅でもっとも楽しみにしていたのは、バンコクから車で1時間半ほどのところにあり世界遺産にも登録されているアユタヤ遺跡に行くことである。そこで旅行会社が企画している日本人向けの1日アユタヤツアーへ参加することにした。ツアーには、流暢な日本語を話すタイ人女性のガイドが付き、アユタヤの定番コースである国王の別荘やらアユタヤ王朝時代の遺跡はもちろん、日本人向けということもあって、かつての日本人町跡も観光コースに組み込まれていた。日本人町というのは、江戸時代初期の頃、タイ（当時はシャム）にわたりアユタヤ王朝に仕えた山田長政がこの地に築いた町のことで、全盛期には千数百人の日本人が住んでいたとのことである。

アユタヤの町をマイクロバスで移動中、ツアーガイドが突然「つぎは山田さんに会いに行きまーす」と言ったとき、あらかじめコースに日本人町跡が含まれていることは分かっていたが、「山田さん」が山田長政を指していることに気付くまで数瞬の間が必要だった。日本人町跡はアユタヤ市郊外にあり、バスを降りるとそこは公園のように整備されていた。入り口正面には日本語で「アユタヤ日本人町跡」と書かれた石碑が立っている。が、よく見ると「アユタヤ」の部分「アユチャ」となっている。石碑を制作したタイ人がうっかり彫り間違えたのだというツアーガイドの説明に、ツアー参加者は笑いながら一斉にカメラのシャッターを切った。

しかし、日本人町跡といっても見どころらしきものが何もない。日本人町が復元されているわけでも、遺構が残っているわけでもない。バスへの集合時間までの小一時間、まったくの手持ち無沙汰になってしまった。敷地内に唯一存在しているのがみやげ物屋の建物で、猛暑の中そこだけはエアコンが効いているため、ツアー参加者の足は自然とそこに向くことになる。すると店内の一角には真新しい山田長政像や日本人町の模型が設置されていて、今度はツアーガイドに替わりみやげ物屋の責任者らしき日本人が簡単な説明をしてくれた。どうやら会いに行くと言っていた「山田さん」はこの銅像のことらしい。

しかし、日本人町に関係するものは本当にここまでで打ち止めであり、あとはもう店内のみやげ物を物色する以外にすることがなくなってしまった。他のツアー客は、ここぞとばかりにみやげ物を買ってこんでいる。日本人の店員がいるので商品について丁寧に説明してもらえるし、日本へ安心して持ち込めるように木工品には衛生上の処理もしてあると聞かされると、タイ人が経営する店より少し値が高くてもしっかり手が出してしまうようだ。

しかし、買い物の方はほどほどに、時間をもてあました私は、先ほど山田長政について説明していた日本人責任者をつかまえて、この施設についていろいろと尋ねてみた。最初に分かったのは、この日本人町跡や山田長政像が日本のODA（政府開発援助）で整備されたということだ。タイにとって日本は最大のODA援助国であるのは事実であるが、その一部が、このような観光地整備にまで利用されていたというわけだ。では、その日本人責任者は政府関係の職員なのかと聞いてみると、あからさまに嫌そうな顔つきになって「自分は単にボランティアで来ているだけだ」と言う。そのあわてぶりが気になり、では本業は何をしているのかと重ねて問うと、アユタヤで山田屋というホテルを経営して、頼まれてボランティアで来ているのだと、

ボランティアという点を重ねて強調していた。

しかし、その場では気付かなかったことだが、後で購入したみやげ物を詳しく調べてみると、人気商品として勧められて購入した商品の製造元がしっかり山田屋となっていた。ということは、あの日本人はボランティアどころか、単なる自社製品の販売員だったわけである。そして、山田屋の商品を売るための店舗や客寄せ用の観光施設をODAで、すなわち日本人の税金で建設し、日本人向けの観光コースに組み込んでいたというわけだ。かねがね批判されてきた無駄なODAの典型のような事例であり、なるほど質問されるのを嫌がっていたわけである。もっとも、この日本人町跡のみやげ物屋は、山田屋製品だけでなく、タイ製品も扱い、レジ打ちにも若いタイ人女性を雇うなどしているので、まったくタイ経済の発展に貢献していないとは言わない。それでも、このODAは誰のため？という疑問を拭うことは出来なかった。しかも、そのみやげ物店で買ったタイ・シルク製品は後日、別のタイ人の店で同じ物が半額以下の価格で売られているのを見かけ、ますます後味の悪さを感じた。

短いタイ滞在の中で、独自の文化や歴史をもつタイに強く魅了されると同時に、グローバル化と急激な経済発展の中で様々な矛盾に直面している現状や、日本とタイとの結びつきのあり方等をいろいろと考えさせられる旅でもあった。

自分で決めるということ

生活科学科講師 北村 香織

この「図書館だより」を読んでいるのは、高校から短大に進学した18歳から20代前半の方々が多いと思う。短大に進学するというのも大きな決断であったであろうけれど、これからは更に、「自分で決める」という機会が増えてくる時期である。身近なことでいえば、短大では高校までのように時間割が決まっているわけではないので、どの講義を受講するのかということも自分で決める。バイト先も自分で決めたであろうし、「就職先」も自分で決めていくことになる。もちろん、彼氏や彼女も自分で決めるであろう（色々な状況はあるだろうけれど…）。

「自分で決める」ということは、一般に話される時には「自己決定」という言葉で表現されることが多い。また、「自己決定」を否定する人はなかなかいないし、実際この言葉には常に肯定的なイメージが付きまわっている。確かに、自分のことについて自分で決めることは大切だ。でも一方で、そんなに簡単なことではない、とも考えるのだ。ここでは、私自身が大学に入ってから今まで、「自分で決める」ということについてどう感じたり、どう考えたりしてきたのかを簡単に振り返ってみることで、その中身について少しでも整理をしてみたい。そして、皆さんが「自己決定」ということについて考えてもらうきっかけになってくれれば嬉しいと思う。

高校生から大学生へ

大学に入学して、私も皆さんと同じように、初めて自分で時間割を組み立てるという作業をすることになった。それはそれでとても楽しいことであったが、もし間違えて登録したり、卒業に必要な単位をとっていなかったりしても、誰も注意してくれず、時間割に対しての責任は全て自分で負う仕組みになっていた。また、ホームルームのようなものがないので、掲示板をみて自分でさまざまな情報を手に入れる必要があった。生活に関しても自由度が高まり、高校は制服だったが、大学では自由に服を選んで着ていけばいいし、校則があるわけではないので、髪型も髪の色も、カラオケも自由。20歳になったらついお酒も飲めることになった。好きなことを学べばいいし、就職先も自分で考えて自由に決めればいいのだ。

自己決定の範囲の拡大は、快適な生活を送るためにも、自分自身を表現するためにも必要なことである。一方で、バイトをいれたり友達と遊んだりしながら、割と忙しい学生生活を送っていながらも、高校生だった頃よりも先が見えないような、不安な気持ちも同時に抱えていた。「自分は本当にこれでいいのだろうか」という疑問がわくのである。例えばそれまでなら、「先生がやれということは全部やったのにうまくいかなかった」「お母さんが言ったとおりにしたら、こんなことになった」とある程度人のせいにはできた、つまり自分だけで責任を負わなくてよかったのが、「自分で決めたのだから」と逃げられなくなるし、どこまで何をすればいいかの規準すら自分で決めなければならない。自己決定にはある程度の「責任」が問われるのである。

高校生の頃は制服が決められていて個性が出せず、「私服の学校いいな～」とも言っていたけ

れど、実は毎日服のことを考えずに過ごせるので、結構気に入っていた。大学では、服にも気を使わねばならず、実際少し面倒くさいと感じていたのである。ご飯を食べにあって、メニューから選ぶのが面倒で「何でもいいので、おすすめのもの持ってきて下さい」と注文したり、決めないことの方が絶対的に楽なこともある。自己決定は必ずしもいいとも限らず、「決めない」方が生きやすいこともあるのだ。

条件付きの自己決定

大学に通っていた4年間、脳性マヒの障害があるご夫婦の家にボランティアで介助へ行っていた。とにかく、何かやってみようと思って飛び込んだが、私にとっては貴重な経験となった。そのご夫婦は日常生活の殆どに介助が必要なのだが、私のような学生ボランティアを中心に市のヘルパーも利用しながら、いわゆる「自立生活」を送っていた。現在の日本の福祉制度では、在宅の重度の身体障害者に対して24時間の介護の保障というは行っていないので、現実には家族がずっと世話をしていくか、施設に入所するかという選択肢しか残されていない。それでも、いつまでも親元にいるのではなく自分の家庭を持って自分たちで暮らしたいということを主張し、行動に移した人たちがいて、このご夫婦もそのうちの2人である。

とはいえ、決して安定した生活ではなく、例えば私のようなボランティアが何らかの事情で急に行けなくなったりすれば、その日のご飯は無いし、トイレにも行けない。あくまでボランティアなので何の保障もない為、代わりの人も自分で探さなくてはならない。私自身も、自分が行けなくなった時のことを考えると非常に大きなプレッシャーであった。その上、大ケガをしても、トイレすら満足に行けなかったとしても、それは「自己決定」により勝手に自立生活を行っているのだから「自己責任だ」という論理が待っている。確かに、この自立生活をする人たちは「失敗する自由・危険を冒す自由」を訴えていた。人生の選択肢が殆ど無かった（あるいは無い）人々の悲痛な叫びである。人の行動には責任が伴う。これは認めたとしても、自分の家で生活をする、ということに対する選択肢を全く用意せず、「自己責任」を強調するのは一体どういうことなのだろうか。私は2006年に施行された「障害者自立支援法」にも同じようなニュアンスを感じるのである。「障害者の自立を支援する」といいつつ、「施設やサービスは自由に選べますよ」といいつつ、「自己決定を尊重」しつつ、最終的な責任だけを障害者に負わせるものになっていないだろうか。国のお金は無いわけだし、重度の障害を持つ人は施設で、それが嫌な人はお好きにどうぞ、という所は変わらないのではないか。安易に「自己決定」を使うことで、かえって真意を隠すことになっている。「自己決定」には、制限をつけての「自己決定」も存在するといえる。

施設にて

大学を卒業したが、もう少し社会福祉の実態を見るてがかりをつかんでから社会に出たいと考え、大学院に進学した。大学院卒業後、私は、知的障害を持つ人の生活施設（18歳以上対象）で働いていたのだが、そこでは、利用者の自己決定と職員としての仕事との間で揺れ動く日々が続いていた。社会福祉支援では「自己決定の尊重」というのは対人支援の際の原則的な考え方になっている（バイスティックの7原則）。しかし、施設というのは、集団で生活をするところ

るであり、「～をしたい、～をする」というようなそれぞれの自己決定をすべて尊重していると、施設での生活自体が成り立たない。

また、「支援する」ということを意識するとさらに、何がいいのかわからないが多かった。入職したての頃、私は夕食の食事介助を行っていた。食事というのは利用者にとって、日々の生活の中での大きな楽しみである。食事の内容は、毎回決められたものであるし、せめて食べる順番ぐらいは自分で決めればいいのではないかと思い、「次はどれを食べるか」というようなことを聞きながら介助をしていた。最初にデザートのリンドを1個食べてみたり、おかずが先になくなり、ご飯が最後に少し残ったりという食べ方になった。それが、先輩職員の目にとまり、「何故、介助しておきながら、デザートを先に食べたり、バランスよく食べさせないのか」と注意をうけた。確かに、その指摘は間違っではおらず、よく噛みバランスよく食べることでご飯をおいしく味わうことができる。とはいえ、何故私が食事介助をしているかといえば、その利用者は自分で食べれば勢いにまかせてしまい、噛まずにどんどん飲み込んでいくためにご飯が詰まるという理由からであった。食べるスピードと噛むことについては細心の注意を払っており、程度にもよるのだが、「デザートを先に食べることも別によくないか」「それぐらい本人の勝手では」という気持ちも消えなかった。また、食事介助が必要な人はデザートを先に食べるぐらいならよいが、ご飯とおかずは三角食べでなくてはならず、ただし、自分で食べることができる人は自由な食べ方をしてもよい、というような線引きも難しいし、それに意味があるのかどうかもわからない。

同じようなことであれば、寝る時間やお風呂についてもいえる。お風呂など、利用者が「今日は面倒くさいし、明日でいいわ」と言うことがある。本来そんなことは誰にでもある状況だが、専門職集団が関係する団体生活の中で、そんな簡単なことすら認めるのは難しいのが現状である。今日、入れなかったら期間があいてしまうし、一度それを認めるとなかなか入れなくなるパターンもある。周りの人がそれに影響され、団体で入らないということもある。そういった支援上の問題+職員のプライドなども絡んで、ちょっとした自己決定を阻害することがある。生活のことであるし、ある程度の柔軟性は求められる。本来は、柔軟に対応しつつ、本人に気持ちよくお風呂に入ってもらおう手立てを考えるのがプロだと思う。

ただ、自己決定を支援するというのは、下手をすれば、利用者の日常生活そのものに支援する側それぞれの価値観を押し付けることにもなり、実際に社会福祉関係者の中でもその方法については反省されつつある。他者に自分の自己決定を侵害されないために、「自己決定」を言わなければならない側面があるといえるだろう。脳性マヒの障害を持つ女性の次の言葉は印象的である。「私は別にこれ以上（髪を）伸ばそうという気はない。が、言うことをきいて切ろうとは思わない。〈切る時は自分の意思で切ると決めている。〉自分の意思なくして切った時ほど悲しいことはない。」（新田絹子（1970）「府中療育センターからの手紙」『青い芝』79号）そもそも、日々の生活において、常になされる自己決定があり、それは非常に細かいことの積み重ねなのである。

おわりに

私が経験してきた一部の「自己決定」の中にも様々な次元があった。皆さんは、これから自

分で人生を決めていかなければならないし、実際は常に「自分で決める」という場面に遭遇している。それがどのような選択であっても自分が納得いくように決めて欲しいし、他者の「自己決定」にも心を配って欲しいと願っている。その為には、「自己決定」という言葉を使用する時には、きわめて状況を限定しなければならないし、様々な次元の自己決定を混同することなく考えて欲しいと思う。

■ 新規受入図書案内 ■

(2007. 4 ~ 2007. 9)

総 記 (000)

情報モラル宣言 久保田 裕
 雑誌新聞総かたろぐ
 メディア・リサーチ・センター株式会社
 世界雑学大全 世にも奇妙な事実1137のリスト
 デヴィッド・ウォルキンスキー
 白洲正子全集 白洲 正子
 他者との出会い Encounter with the other
 宮本 久雄

〈岩波ブックレット〉

イギリス「教育改革」の教訓 阿部 菜穂子
 放課後の居場所を考える 下浦 忠治
 公共事業は変わるか 永尾 俊彦
 国民投票 憲法を変える? 変えない? 豊 秀一

〈岩波新書〉

四字熟語ひとくち話 岩波書店辞典編集部編
 アラビアンナイト 西尾 哲夫
 すばる望遠鏡の宇宙 海部 宣男
 ベースボールの夢 内田 隆三

哲 学 (100)

暮らしの哲学 池田 晶子
 心理学総合事典 佐藤 達哉
 30分で学ぶ心理学の基礎 今在 慶一朗
 「あっ、忘れてた」はなぜ起こる 梅田 聡
 夢分析実践テキストブック
 エドワード・C.ウィットモント
 世界神話大事典 イヴ・ボンヌフォワ
 聖徳太子と飛鳥仏教 曾根 正人
 宗教vs.国家 フランス「政教分離」と市民の誕生
 工藤 庸子

歴 史 (200)

黄金の島ジパング伝説 宮崎 正勝
 平安京のニオイ 安田 政彦
 日本の200年 徳川時代から現代まで
 アンドルー・ゴードン
 「過去の克服」と愛国心 朝日新聞取材班
 オリエンタリズム E.W. サイド
 ベトナム戦争のアメリカ もう一つのアメリカ史
 白井 洋子
 教養のための西洋史入門 中井 義明
 ローマはなぜ滅んだか 弓削 達
 指先で紡ぐ愛 グチもケンカもトキメキも
 光成 沢美

社会科学 (300)

法律からみたリスク 長谷部 恭男
 日本人が「国際人」といわれないワケ
 グレン・デイビス
 ニュース検定公式問題集
 日本ニュース時事能力検定協会
 立法の制度と過程 福元 健太郎
 神の法vs.人の法 内藤 正典
 娘と映画をみて話す民族問題ってなに?
 山中 速人
 第三の改革を目指して 証言でたどる分権改革
 松本 克夫
 三重県の行政システムはどう変化したか
 吉村 裕之
 テキストブック 地方自治 村松 岐夫
 銀行関係訴訟法 塩崎 勤
 よくわかる法哲学・法思想 深田 三徳
 「もめごと」の法社会学 櫻村 志郎
 「日本国憲法」を英語で読んでみる
 別冊宝島編集部
 判例から学ぶ憲法・行政法 川崎 政司
 目で見る憲法 初宿 正典

国家は僕らをまもらない 愛と自由の憲法論

田村 理

行政法入門

藤田 宙靖

行政法判例集 総論・組織法

大橋 洋一

民法研究ハンドブック

大村 敦志

左手の証明

小澤 実

刑事政策のすすめ 法学的犯罪学

前野 育三

極刑 死刑をめぐる一法律家の思索

スコット・トゥロー

テキストブック現代司法

渡部 保夫

国境なき医師団とは

早乙女 勝元

入門ゲーム理論 戦略的思考の科学

佐々木 宏夫

ミクロ経済学の基礎

矢野 誠

持続可能な経済発展 ヨーロッパからの発想

福島 清彦

人口から読む日本の歴史

鬼頭 宏

環境問題の経営学

高橋 由明

就職活動マナー&エチケット 就職試験情報研究会

ゼミナール現代会計入門

伊藤 邦雄

消費税の諸問題

租税法学会

日本財政破綻回避への戦略

貝塚 啓明

メディアと権力 情報学と社会環境の革変を求めて

ジェームズ・カラン

日本古代家族史の研究

関口 裕子

ワーキングプア 日本を蝕む病

NHKスペシャル「ワーキングプア」取材班

年金問題の正しい考え方 福祉国家は持続可能か

盛山 和夫

欧米主要国における労働者派遣法の実態

日本労働研究機構

現代社会福祉事典

仲村 優一

知っておきたい介護技術の基本

岩橋 成子

こんな夜更けにバナナかよ

渡辺 一史

なぜ援助者が虐待に走るのか

市川 和彦

学びを深める食育ハンドブック

奈須 正裕

就職試験受かる小論文・作文模範文例

新屋出版社編集部

TEACCHとは何か

ゲーリー・メジボフ

LD, ADHD, 高機能自閉症等の子どものための指導

教材集

日本LD学会

三重県における環境保護 現状と課題

三重短期大学公開講座運営委員会

食の思想と行動

豊川 裕之

八月十五日の空 日本空軍の最後

秦 郁彦

自然科学 (400)

自分の体で実験したい 命がけの科学者列伝

レスリー・デンディ

Excelで学ぶ基礎数学

作花 一志

マンガでわかる統計学

高橋 信

やりなおし高校の化学

斎藤 勝裕

眼の誕生 カンブリア紀大進化の謎を解く

アンドリュース・パーカー

人と生き物の地理

高橋 春成

海の生物多様性

大森 信

医学略語コンパクト

富野 康日己

超入門生化学・栄養学

穂苅 茂

メタボリックシンドロームQ&A

松沢 佑次

栄養士・管理栄養士のためのなぜ? どうして?

医療情報科学研究所

Q&A 1週間の食育

服部 津貴子

最新食品標準成分表 五訂版

細谷 憲政

やさしい栄養・生活統計学

縣 俊彦

症例から学ぶ臨床栄養教育テキスト

本田 佳子

栄養・食事管理のための施設別給食献立集

鈴木 久乃

工学・技術 (500)

環境問題文献目録

日外アソシエーツ

四日市学講義

朴 恵淑

自然保護ハンドブック

沼田 真

建築の21世紀 専門者論理からの脱却

村田 麟太郎

建築計画読本

舟橋 國男

桂離宮

新建築社

福祉空間学入門 人間のための環境デザイン

藤本 尚久

五一C白書:私の建築計画学戦後史

鈴木 成文

時間の中の住まい 高橋公子と五つの住まいの現在
日本女子大学高橋研究室の会

「新編」住居論 山本 理頭
アパレルガイドブック 池田 洋子
Yomeカフェレシビ 大井 純子
高野優の子育てハミング日和 高野 優
2歳からはじめるよみきかせ絵本 内田 伸子

産 業 (600)

麦政策改革と製粉産業 重田 勉
雑穀を旅する スローフードの原点 増田 昭子
やさしい造園図面の描き方 だれにもできる 新装版
建築資料研究社
設景の世界 小林 治人
嘘と食欲 西欧中世の商業・商人観 大黒 俊二
鉄道忌避伝説の謎 汽車が来た町、来なかった町
青木 栄一

芸 術 (700)

日本美術のことは案内 日高 薫
日本美術の歴史 辻 惟雄
ヘルプマン! くさか 里樹
光とともに…自閉症児を抱えて 戸部 けいこ
すぐわかる日本の伝統文様 名品で楽しむ文様の文化
並木 誠士
トリスタンとイゾルデ ワーグナー
栄養士のための運動生理学 飯塚 誠市
小児栄養実習 大里 進子

語 学 (800)

ことばと認知のしくみ 河野 守夫
ドイツ語のしくみ 清野 智昭
フランス語のしくみ 佐藤 康
イタリア語のしくみ 野里 紳一郎
マズい日本語レストラン 樋口 裕一
朝日キーワード就職 朝日新聞社
就職試験の小論文・作文 小松 五郎

ドイツ語学への誘い

河崎 靖

文 学 (900)

世界文学あらすじ大事典 横山 茂雄
ぼくもいくさに征くのだけれど 竹内浩三の詩と死
稲泉 連
探偵ガリレオ 東野 圭吾
アヒルと鴨のコインロッカー 伊坂 幸太郎
ジェネラル・ルージュの凱旋 海堂 尊
破邪一睡の夢 北織 聖健
吉原手引草 松井 今朝子
楽園 宮部 みゆき
介子推 宮城谷 昌光
くつしたをかくせ! 乙一
アザッテの人 諏訪 哲史
司馬遼太郎歴史のなかの邂逅 司馬 遼太郎
ツレがうつになりました。 細川 貂々
私の手になってくれたあなたへ 小山内 美智子
新編シェイクスピア案内 日本シェイクスピア協会
Harry Potter and the deathly hallows

J.K. Rowling



この冊子は古紙配合率100%、
白色度70%の再生紙を使用し
ています。